第763号 平成20年12月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年8月31日　第三種郵便物認可

2008年（平成20年）
12月号（No. 763）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価1部　150円
URL●http://www.jac.or.jp
e-mail●jac-room@jac.or.jp

皇太子さまをお迎えして日本山岳会平成20年度年次晩餐会開催

■466人が出席

平成20年度年次晩餐会は12月6日、東京・品川のグランドプリンスホテル新高輪国際館パミール「北辰」で開催された。皇太子さまがお忙しい公務のなか3年ぶりに出席されたのをはじめ466人の会員が集い、なごやかに歓談した。

■会長挨拶

皇太子さまは、今年8月、念願の富士山に初登頂された。年次晩餐会のテーブルも「富士山」と名づけられていた。晩餐会に先立ち秩父宮記念山岳賞受賞講演会にも出席された。宮下秀樹会長は、お迎えできたことを喜び、続いて日本山岳会の現状について次のように報告した。

一、今年は大きな成果があった。インドヒマラヤのカランカ峰北壁に天野、一村、佐藤の各氏が初登攀し、アジア・ゴールデンピッケル賞を受賞した。平出氏はインド・カメット峰の南東壁に初登攀した。しかし、チベット・クーラカンリでは雪崩による悲しい事故があった。岩手では大地震でバスが転落し大きな事故となった。日・中・韓三国学生交流登山は、韓国・雪嶽山（ソラクサン）などで行なわれた。来年は中国の6000メートル級の山に挑戦する。

一、12月19日から1カ月間、剱、穂高、八ヶ岳の3地域を対象とし、日本山岳会が冬山の天気予報を発信する。大いに利用してほしい。

一、元気な会員を紹介したい。南川金一会員は、機関誌『山岳』の編集に尽力されたが、2000メートル以上の642座を7年前にすべて登頂された。今度は1900メートルの山々に挑戦され、もう少しで終わるとのこと。南井英弘会員はペースメーカーを入れて高所登山を続けておられる。西孝子会員は20年来、ヒマラヤ通いを続けておられ、今年15回目のカラパタールに登頂された。

一、3つのことをお話したい。1つは、12月から施行された法人改革は会の行く末を決めるものであり十分に検討していきたいこと。2つ目は各地で展開されている森づくりで、日本山岳会ならではの森づくりがどのようなものか、運営ルールを考えたいこと。3つ目は、山の記念日の制定に向けて活動したいことだ。「山を敬い、山を尊ぶ」という言葉をもとに、美しい自然を後世に残すきっかけとなればと思っている。

■新名誉・永年会員の紹介

物故会員に対して黙祷した。昨年の晩餐会以降に亡くなられた会員は52人。太田敬・坂倉登喜子・

目　次

平成20年度年次晩餐会開催……1
伊藤愿没後50年の遺稿出版の経緯‥4
「森づくり」活動のあり方、
　宮崎幸博氏のオピニオンは
　事実に基づいていない……6
チュルー最東峰登頂……8
東西南北……9
　狩野芳崖と妙義山
　金華山1万回登頂を祝う
　新曲『地球をこわさないで!』誕生秘話
支部だより……11
　福井支部／山梨支部
活動報告……12
　図書委員会／集会委員会／
　山の自然学研究会
図書紹介……14
図書受入報告……16
会務報告……17
ルーム日誌……18
会員異動……18
新入会員……18
INFORMATION……19

▶日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
月・火・木 …… 10～20時
水・金 …… 13～20時
第2、第4土曜日 …… 閉室
第1、第3、第5土曜日 …… 10～18時
年末年始休室 ・12月29日～1月5日

466人が出席した年次晩餐会で挨拶する宮下会長

川崎精雄名誉会員らが逝去された。心からご冥福をお祈りしたい。

新名誉会員が紹介された。2人の中村会員だ。中村純二会員は1984年にカラコルム学術登山隊の総隊長として参加された。副会長などを歴任し、会の発展に尽くされた。中村保会員はヒマラヤの東の調査を続けられ、今年4月には英国王立地理学協会からメダルを受賞された。英文ジャーナルの編集に尽くされ、日本山岳会の活動を世界に発信された。英文ジャーナルの編集に対しては、その功績をたたえ「会長特別賞」を贈呈した。

中村保・新名誉会員は「8年前にアメリカから日本の活動が分からないと言われた。そこで日本の活動を世界に発信した。欧米のみならず、世界に理解されてきたと思う。今日は私の74歳の誕生日。いい星の下に生まれた、と勝手に思っている」などと語った。

新しい永年会員は35人。195 8年4月から翌年3月までに入会した会員だ。以降継続して50年間、会員として活躍された。会員番号は2555と4656から4832である。18人が出席し、宮下会長から永年会員章が手渡された。

新永年会員を代表し、酒井敏明会員は「53年のエベレスト、56年のマナスルと、ヒマラヤのジャイアンツが次々と未踏峰の座を明け渡していた時代だった。深田久弥さんが雑誌にヒマラヤの物語を連載していた。桑原武夫先生は、山登りは文明人のみが行なう文化的行為であると言われた。山登りは、間口が広く、奥行きが深い」などと話した。

新永年会員

秋月良造、酒井敏明、森元一、保坂隆司、土屋満、荻野昌宏、住吉仙也、山崎徹、阿部頴二、宝井俊夫、野村哲也、田邊卓司、中野明、山本良子、奥原教永、土合敦彦、早川瑠璃子、市川英脩、高石清和、鈴木羊三、穴田雪江、進藤昭、山本久子、小森恵己子、隈部恵子、音成彦始郎、稲垣純男、日高健二郎、渋谷正己、星譲、吉武正子、庄司駒男、佐藤俊彦、大橋晋、内藤修

■秩父宮記念山岳賞

第10回秩父宮記念山岳賞は、「大日岳巨大雪庇の研究」と東海支部の「ローツェ南壁冬季初登攀」に決まった。表彰式が行なわれ、巨大雪庇の研究に携わった川田邦夫、飯田肇、横山宏太郎の3会員、また東海支部の尾上昇、田辺治の両会員が表彰された。

■新入会員は51人

続いて、新入会員の紹介。今年は51人が新しく会員に加わった。代表して堺澤清人会員が挨拶した。「先輩諸氏の指導をお願いしたい。いままで山々に教えてもらったいろいろなことを若い人たちに伝えたいと思う。自然環境の再生などにかかわっていきたい」などと話した。

恒例の鏡開きは、皇太子さま、宮下会長のほか中村純二・新名誉会員、秩父宮記念山岳賞を受賞した川田邦夫会員と田辺治会員、元国土交通相・谷垣禎一会員の6人で行なった。酒は故今西壽雄名誉会員の夫人から寄贈のあった「四海王」。いつもながら、感謝したいと思う。西孝子会員の音頭で乾杯し、会食が始まった。

メニューには「山を愛する方々へ、大地と海のコラボレーション」、「実り多き秋から雪の降りはじめる山の雰囲気」などと、シェフからのメッセージが添えてあった。

会食をはさんで全国28支部会員の紹介があった。参加者は紹介されるたびに立ち上がりハンカチを振った。毎年恒例のイベントだ。

■海外登山報告

晩餐会に先立って午後2時から、1階「紅玉」の間で海外登山報告と秩父宮記念山岳賞受賞記念講演があった。

GIRIGIRI BOYSインドヒマラヤ登山隊（一村文隆隊長、佐藤裕介、天野和明各隊員）が、インドヒマラヤ・カランカ（6931メートル）北壁を初登攀した。1800メートルの上部岩壁を7ビバークで突破し、

9月22日に登頂。天野隊員は「スノーシャワーが激しかった。氷壁を削り、改造テントをかぶるようにしてビバークした」などと語った。この登攀は、韓国で「ビオレドオールアジア」を受賞した。

カメット南東壁登山隊（平出和也隊長、谷口けい隊員）では、平出氏が昨年に続いて講演した。インドヒマラヤ・カメット（7756メートル）南東壁の初登攀を報告した。標高差2000メートルの南東壁中央にラインを引いて、6ビバークで10月5日に登頂した。「ルート図のない壁の挑戦だった。7日間取り付いて、雪崩の起きる時間が分かるようになった」などと話した。

貴重な図書が展示された山岳図書展

■秩父宮記念山岳賞講演

今年の秩父宮記念山岳賞は久々に複数の受賞となった。講演会に参加した人は雪庇の巨大なことに驚き、ローツェ南壁へのあくなき挑戦に感激した。講演会には、皇太子さまも出席された。

「大日岳巨大雪庇の形成機構に関する研究」は川田邦夫、飯田肇、横山宏太郎の3会員。2000年3月5日、大日岳の山頂付近で巨大雪庇が崩壊し冬山研修を行なっていた2人の学生が死亡した。これを契機として多くの人が巨大雪庇について研究した。現地調査が2005年4月7日～27日に行なわれ、登山家、ガイド、研究者など総勢51人が参加した。

調査結果によると、巨大雪庇は稜線沿いに200メートルにわたり発達し、先端は稜線から32メートル、深さは最大18メートルに達した。それは、山稜から数十メートルも風下側に発達する吹きだまり状の積雪構造だった。講演では、概要を横山会員、巨大雪庇の形状を飯田会員、雪庇の形成と消滅を川田会員が担当した。

冬季ローツェ南壁初登攀は東海支部登山隊（尾上昇・総隊長、田辺治・登山隊長）。2006年12月、東海支部登山隊は3度目の挑戦でローツェ南壁の冬季初登攀に成功した。世界第4位の高峰ローツェに突き上げる標高差3300メートルの巨大岩壁だ。

講演会で尾上総隊長は「登山はオーソドックスな極地法を採用した。確実で安全という選択。いちばん苦労したのは隊員集めだった。冬のローツェに行く隊員は極めて少なかった」と話し、田辺登山隊長は「冬の8000メートル峰はマイナス50度、50メートルの風が吹く。体感温度は相当なものになる。しかし雪が降らない。雪崩の心配がない。クリスマスイブまでは好天が続く。短期決戦だった」などと語った。

■貴重な図書を展示

慶雲の間の催し会場。正面を飾ったのは、皇太子さまの写真「雲表のマナスル山群遠望」だ。説明には「ネパールヒマラヤ機窓より」とあった。20年ほど前に撮影されたものをデジタル処理で甦らせたものだという。資料映像委員会・アルパインフォトクラブによる山岳写真展には40点ほどの山岳写真が展示された。

山岳図書展には、図書委員会が日本山岳会の書庫に眠っている貴重な図書を出展した。文化9（1812）年発行の谷文晁『日本名山圖會』、明治26（1893）年発行の高島得三『歐洲山水奇勝』など、和書33点・55冊、洋書26点・38冊が展示された。

日本山岳会に図書室が設置されたのは昭和4年だったという。20年に空襲で消失し、24年に再建された。現在は和書1万2000冊、洋書4000冊を収蔵している。

支部、同好会、同期会が、それぞれに山岳書籍、文献、地域活動報告などを展示・販売した。

■筑波山で懇親会

翌日の懇親山行は集会委員会が主催し、茨城・筑波山で行なった。晴天に恵まれたこともあり、参加者は100人近くにもなった。遠方からの参加者が多く、時間を節約するため、上りはケーブルを利用、頂上から北側へ三々五々歩いて下り、暖かい日だまりのなか、筑波高原キャンプ場で豚汁を楽しんだ。

（文＝高橋重之）

カルチャー

伊藤愿没後50年の遺稿出版の経緯

伊藤愿（すなお）の遺稿集が、次女・松方恭子さんの編集で『妻におくった九十九枚の絵葉書――伊藤愿の滞欧日録』として上梓された（『山』761号に紹介）。去る11月14日、東京・六本木の国際文化会館で催された出版を祝う会は、松方家ゆかりの方々、日本山岳会の大塚博美元会長をはじめ、京大学士山岳会、甲南山岳会の後輩の諸姉諸兄が約120名出席、心温まる山と人との数々の出会いが語られた。

2008年7月
清水弘文堂書房刊
A5判　336ページ
定価　2100円

伊藤愿とは

伊藤愿（呼称ゲン、以下愿さん。1908～1956年、会員番号1265）は、昭和初期、旧制甲南高校山岳部の創成期に、北穂滝谷や小槍の単独登攀、5月の槍、薬師、立山縦走、積雪期の善六沢から西穂単独行などで当時の山岳界の注目を浴びた。京都大学へ進学後もジャンダルム飛騨尾根、鹿島槍北壁の初登攀などの記録がある。そのころすでにヒマラヤに目を向け、パウル・バウアーの『ヒマラヤに挑戦して』を翻訳出版（黒百合社1931年、中公文庫1992年）。

さらに、当時ヒマラヤ登山には不可欠とされ始めた極地法登山を、我が国で初めて冬の富士山で実践し、世に紹介した。昭和11年には、京大のK2遠征計画の準備のために単独で渡印。戦後の日本山岳会のマナスル遠征に際しても、中央官庁勤務者の立場で、その実現に尽力した。

出版の発端

さて、昭和31年48歳の若さで夭逝された愿さん、没後、すでに50余年の今、なぜこのような本が出版されたのか。ちょうど愿さんの生誕100周年、房子夫人の卒寿祝いという節目ではあったが、愿さんの次女・松方恭子さんが、本書の編集を思い立つまでには、いくつもの偶然ともいえる人と人との出会いがあった。

マッターホルンを背に、1951年8月撮影された伊藤愿

愿さんは、昭和26年に、6カ月にもおよぶ欧州への官費出張の機会を得て、アルプスへも足を延ばし、マッターホルンの単独登攀などを楽しんだ。この出張中に房子夫人に「99枚の絵葉書」を送ったことを、甲南の後輩の田口二郎さんが後に追悼文（『山岳』第51年所載）で披露して、山仲間の間で愿さんの愛妻家ぶりが一躍有名になったという経緯がある。

99枚の絵葉書の行方

4年前の暮れに伊藤文三さん、平井一正先生、平井吉夫氏と私で、入院中の房子夫人を、偶然同じ病院に入院中の山岡静三郎さん（東大・甲南OB）の計らいで、お見舞いし、愿さんのことなどをお聞きしようと伺った。この日、「99枚の絵葉書」にも話がおよび、房子さんがおっしゃるには、亡くなられる前の入院闘病中、愿さんはこれを原稿用紙に丹念に書き写された。後年、活字化の意図があったのかも知れない。オリジナルはこともあろうに、当時珍しかった外国からの絵葉書を看護婦が知人に見せたいと言って持ち出し、タクシーに置き忘れてしまった。新聞広告まで出して探したが見つからずじまいで、労作の手書きの写しもその後だれに貸したか、行方不明のままとのことだ。

ところが、同席の平井吉夫氏が突如「それは私の手許にあります！」と言う。由来をたどれば、持ち出したのは田口二郎さん。前述の愿さんの追悼文の執筆の参考にされたのかも知れない。それが20年ばかり前に飯田進さん（当時図書担当理事）に託され、岡澤祐吉さん（『スイス　山案内人の手帖より』の著者）を経由したりした後、田口さんの亡くなる前後に平井氏に回ってきたというのが経緯。

写しの書簡集は無事何十年ぶりかで平井氏から房子夫人の手にもどって一件落着。後に恭子さんの知るところとなり、遺稿集の編集へと繋がっていった。（越田和男）

伊藤愿と甲南山岳会

伊藤愿さんは、1931年に今西錦司さんや西堀栄三郎さんなどと一緒に京大学士山岳会（AACK）を創設し、ヒマラヤを目指した。特に彼の翻訳になるパウル・バウアーの『ヒマラヤに挑戦して』という本が契機になってAACKがヒマラヤに向けて具体的に動き出し、彼自身インドに行って、K2登山の許可を取ったいきさつがある。日本で初めてポーラーメソッドによる富士登山を行ない、極地法と命名したのも愿さんである。

ただ愿さんのことは断片的にしか伝わっていない。そのプロフィルの全貌を調べておかないと、後々までわからないだろうと危機感を感じて、いろいろと資料を調べた。

きれいに刺繍された絵葉書。1951年9月29日付

私は神戸大学を定年退職し、甲南大学に勤務していた。そしてその関係から甲南山岳会の多くの人たちと親交を結ぶことができた。愿さんは旧制甲南高校の出身であり、甲南大学山岳部の大先輩である。資料も豊富であった。私が房子夫人に会いたいという希望を知った山岳会の有志が、2004年12月、青梅の慶友病院に入院している房子夫人をお見舞いに行く機会を作ってくれた。

房子さんとの談話のなかで、失われたと思っていた99枚の絵葉書のコピーを、同行した平井吉夫さんが保管していることが判明した。このことを知った房子さんは大変喜ばれ、さっそくそれを病院に届ける約束ができた。

この本の出版には、本当に物語といっていいほど、実に興味のある偶然と出会いと幸運があるが、これが出版の第一段階である。

出版に至る偶然と幸運

私は房子さんから聞いた話や、越田和男さんの資料を使って、2005年3月のAACKニュースレターに「人物抄伊藤愿さん」を発表した。そしてそれが甲南山岳会のホームページに転載された。それが第二段階である。

それを人づてに聞かれた愿さんの次女・恭子さんが、2007年の夏を過ぎたころ、私の自宅に電話を下さった。愿さんの記録を集めて本にしたいが、私の記事を転載したいという用件であった。恭子さんとはそれまで一面識もなかった。恭子さんは甲南大学に電話され、私の電話番号を聞いたそうである。もし応対した人が、個人情報を盾に、教えられないと言えばそれまでであった。これが出版の第三段階である。

2008年1月4日に、またまた京都に来られた恭子さんとお会いした。出版の第四段階の始まりである。しかし、そのときの出版の話は小規模のものしか考えておられなかった。私は甲南山岳会の越田和男さん、平井吉夫さんに会って相談するようにすすめた。恭子さんはすぐ行動された。この2人のほか、実に多くの人の援助により、7月には本書の完成をみたのである。それは実に驚くべき早さであったと言えよう。

以上のような数々のドラマチックな段階を経て、はじめて出版されたのが本書である。その経過から分かるように、インターネットの活用にはじまり、偶然と幸運が重なり、そして何よりも恭子さんの情熱と熱意があったからこそできた産物である。房子さんの生前にこの本の出版が間にあって本当によかったと思う。情熱と熱意があれば、決して神様は見捨てないということを実感した。そのような背景があることを知って、ぜひ本書を読んでほしい。（平井一正）

オピニオン

「森づくり」活動のあり方、宮崎幸博氏のオピニオンは事実に基づいていない

船木威志

会報『山』11月号のオピニオン欄に宮崎幸博氏が書かれた《「森づくり活動」のあり方》は「高尾の森づくりの会」の実態について事実と異なる点が多く、何もご存知でない全国の会員や関係者に誤解を招く恐れがあるので、以下、会の運営に携わるひとりとして、誤解を解くための説明と会の運営についての見解を記したいと思います。

私は8年前、「高尾の森づくりの会」（以下、会と書きます）が活動を始めたことを『山』で知り、さっそく会に参加しました。年々参加者が増え続け、最近の月々の定例作業では参加者が100人を超えるほどになりました。宮崎氏は会のなかでは道づくり班の班長として活動されていますが、会で決めた活動計画から外れた行動が多く、きわめて少数派であることと思います。最近、会の活動はますます活発になり200回程度の参加歴は、余り自慢にならない数字です。

一文を記すに先立ってまず、このような投稿が、われわれへの取材もなく、なぜ突然会報に掲載されたかに疑問を呈しておきます。宮崎氏の投稿は、山岳会が進める森づくりの活動指針を提案しているように見えますが、高尾の森づくりの会の現執行部への批判を目的に書かれているとしか思えません。事実が歪曲されています。

以下、宮崎氏の指摘に、順次、説明と反論をいたします。

①営利活動について

全国林業改良普及協会が運営している「高尾グリーンセンター」というホール付き宿泊施設が、最近閉鎖されました。それまで忘年会、研修会等で利用してきたので継続使用できないか思案していたところ、今年7月末に、われわれに運営の話が持ちこまれました。それまでの収支表を見るとても利益の上がるものでないことは分かりましたが、この施設の運営に興味を持ったのは、赤字か黒字かという経済的損得のことではなく、われわれが気軽に使える施設が東京近郊に出来れば、森づくりの活動にとっても山岳会にとっても非常にメリットがあると考えたからです。

しかし、今年8月になって山岳会の吉永常務理事から「山岳会への正式な（運営）提案がなく、契約までの経緯、内容を承知していない」と待ったがかかり、会としての契約はやめました。しかし、山岳会の一般会員や他支部から「応援するから、ぜひやってほしい」とのメッセージをもらい勇気づけられました。「高尾グリーンセンター」はその後、会の有志による個人資格のサポートグループが運営を引き受け、再開を期しています。

②安全優先について

森林管理署の林道整備作業中にブルドーザーの転落事故があったことを、森林管理署が会に説明せよというのはいかがなものでしょうか。報告義務はないわけですから的外れな意見だと思います。

もうひとつの事故は、会の定例作業ではなく、木工細工クラブの作業中のもので、指の一部を切断する事故があったのは事実です。会に迷惑をかけるといけないので内密にしてくれという本人のたっての願いがあったため、班長預かりにしていたもので、河西代表も長い間知らなかったことです。私はその事故現場にいましたので実態をよく承知しています。負傷した本人はケガが公けになり会に迷惑をかけたと気落ちしていましたが、今は元気で作業に参加しています。

「安全」は常に会の最優先課題で、安全を確認しながら作業に当たっていることは言うまでもありません。

③自主性、独立性ある計画とは

荒れた地区の国有林を探し出し、これに広葉樹を復活させ混交林に導くという案は当時の自然保護担

当理事だった河西代表を中心に、われわれ会員が作り上げた計画です。50年をかけて国有林を整備するという申し入れを当方からし、やりたいことをその都度申し入れているのが実情で、林野庁の下請けをやっているのではありません。われわれの活動が先例となり、林野庁や森林管理署に刺激を与えていると言ってよいでしょう。

④執行部の人選と人事の公平性

まずお伝えしたいのは、会は極めて民主的に運営されているということです。

確かに河西代表の在任期間は長いけれども、このような時期に代えることは会にとって大きなマイナスで、当分の間はこの体制でやっていく必要があります。河西代表は3年前に代表交代を考え、後任の人選を始めていたそうです。しかし当時、会の要ともいえる事務局長人事で新旧の交代がスムーズに運ばず、代表交代の話どころではなくなりました。

現事務局長の龍氏は事務能力に非常に長（た）けております。参加人数、イベントも増え事務量が飛躍的に増大しているなか、森林保護、育成のエキスパートとして得がたい人材です。

また、行政との窓口が1人に委ねられているとの指摘ですが、森林管理署や国土緑化推進機構との交渉は事務局企画担当リーダーをはじめ常に複数で行なっており、1人に集中しているとの指摘は間違いです。

その後、小下沢のトイレ建設問題などがあり、自然保護委員会と高尾の森づくりの会とのゴタゴタが、昨年3月から今に至るも続いています。（＊注）

⑤透明性のある会計

会の活動資金は個人会員の会費、法人会費、国土緑化推進機構からの援助で賄われています。予算・決算は審議機関である実行委員会を経て、総会で報告しています。質問・要望も受け付けていて、帳簿を見ることを奨励しており、いつでも閲覧できます。

収入のうち国土緑化推進機構からの援助は当初、山岳会に振り込まれていたため（そのあと高尾の森の会に渡された）、毎年会計報告をしていましたが、その後、財務担当理事から報告の必要なしと言われ、今日に至っています。会計事務は2人の担当者が行ないコンピューターに入力して毎月決算をしています。

以上を読んでいただければ、11月号に掲載された宮崎氏の文書は、いかに「高尾の森づくりの会」の実情を知らないで書いているかがお分かりいただけると思います。

さて、最後にこの宮崎氏の意見のなかで最も気がかりな点を指摘しておきたいと思います。それは投稿文書の冒頭にある「山岳会の森づくり活動は、現状のような各支部の自主性にすべてを任せる運営でなく、本部が森づくりにかかる基本的方向と、守らねばならぬ最低ルールを示すことによって、ひとつの方向に向けた活動を展開すべきだ」とする点です。

なぜこの部分が気がかりかというと、「各支部の自由闊達な活動に任せず、本部が（ルールという名の）規制・統制をすべきだ」と読めるからです。現在の日本山岳会が支部、委員会、同好会の自由な活動に支えられていることは論をまたないところでしょう。支部、委員会、同好会に「高度な自治」が与えられているからこそ、特色のある活動が展開されているのだと思います。

まさか山岳会幹部がこのような規制・統制を求める声に耳を傾けるとは思いませんが、気がかりであると言っておきます。われわれだけでなく支部、委員会、同好会の人達も含めて注意深く見守らねばならないと思います。

いまわれわれは100年先を目指し人材の育成に力を入れ始めました。我が会は必ずや100年の後まで継続し、多くの山々に足跡を残すことになるでしょう。すでにこの兆しが始まっています。今年から始めた年に6回開催される「親子森林体験スクール」は多くの参加者を得、この参加者のなかから会員になる人が出てきました。この行事と並行して、この10月には三宅島の緑化再生事業、11月には新潟県粟島の森林整備に、地元から請われて汗を流してきました。一緒に作業をした島の人達との別れは涙が出るほど感動的だったことを報告して終わりにします。

＊編集部注＝自然保護委員会と高尾の森づくりの会の話し合いは、担当理事らも加わって進行中です。

クロニクル

チュルー最東峰（6038メートル）登頂

南井英弘

北京オリンピック開催の中国では高峰登山は混乱が予想され、その煽りでネパールの高峰に多くの公募隊などが殺到するだろうと考えられた。そこで、「ネパールのトレッキング・ピーク」のなかで、入山者のまれな山を目標に、9月11日、久し振りに単独でネパール入りした。事前にカトマンズのエージェントに「トレッキング・ピークへの登山申請」を依頼しておき、現地でシェルパを3人雇い、コックと助手3人、そしてカトマンズ郊外で11人のポーターを集めて登山態勢を整えた。

カトマンズでチャーターした中型バスでシェルパや登山用具と共にポカラ方面に向い、途中から北方へ合計約7時間のドライブで舗装道路の終点ベシシャール（760メートル）へ移動し、翌日からキャラバンを開始した。

キャラバン開始の日から毎日雨が降った。まだ、モンスーンが明けきっていなかったようだ。途中、谷間からヒマールチュリやマナスル山塊を見るのを楽しみにしていたが、見ることが出来ず残念だった。亜熱帯地域の、特に高度の低い3日間の道々にはパパイヤやバナナが実り、稲田の中を歩くので、蒸し暑くて大変だった。しかし、久し振りにイナゴやヒル、沢ガニ、夜はホタルの乱舞を楽しむことができた。

マナスル山群とアンナプルナ山群の間を流れるマルシャンディ・コーラを遡行し、アンナプルナ山麓のフムデから右にそれてチュルー山群に向けてキャラバンを続け、8日目にやっと猛吹雪のなかにベースキャンプを設営した。

その後6日間、高所順応を兼ねてデポテント（5130メートル）、ACテント（5370メートル）を設営し、9月28日チュルー最東峰（6038メートル）に登頂した。

ACからの登頂ルートは、急峻な氷の上に薄く雪が乗った稜線上をたどった。さすがにヒマラヤのピークだ。早朝、稜線を吹き抜ける風は強くて冷たい。体感温度が想像以上に低く感じられ、シェルパたちも全員がオーバー手袋などを取り出して着用した。彼らが急傾斜の氷の尾根に11カ所、合計650メートルのフィックス・ロープを固定して安全を確保してくれたお蔭で安心して登降ができた。

頂上は岩峰の上に氷がかぶさり、あまりにも尖っているので立つのをやめた。頂上に腰かけたと言ったほうが適切だろう。また、前方に少し高みがあり、片面を垂直に切り取ったような氷壁に大きな雪庇が発達し、剥がれ落ちたようでもあり、近づかないことにした。

AC入りした日と頂上アタックの日のみ連日の快晴に恵まれ、毎日アンナプルナの連峰を眺めながらの登攀は実に快適だった。しばしの間、頂上から360度の展望を楽しんだ。眼前には屏風のように広がる大きなアンナプルナ山群の峰々、少し目を左に回せば日本隊ゆかりのヒマールチュリ、P29、マナスルなどのヒマラヤの高峰が雲一点ない澄み透った秋空に輝いていた。

亜熱帯の地からリンゴや高原野菜畑、秋の麦刈りや蕎麦の取り入れに忙しい山間部、不毛の砂礫地帯、そして積雪に覆われた山肌と氷河の世界といった秋の「ヒマラヤ植生、垂直の旅」となった。これまでの大型ヘリで40分前後でサマガオンまで入ったマナスルや、ラサまで飛行機で入ったシシャパンマ、チョ・オユーといった8000メートル峰登山とはひと味違った経験だった。

さらにカトマンズ出発から帰着までの25日間、日本人には1人も会わない静かな旅だった。8000メートル峰登山の時は、それぞれのBCで豪華なバースデー・ケーキで誕生日を祝ってくれた。今回はキャラバンの最中だったが、嬉しいことにたわわに実るリンゴを使って美味しい「リンゴ・パイ」を手作りし、皆で私の73歳の誕生日を祝ってくれた。

＊

ネパール山岳協会は「トレッキング・ピーク」と称して、6500メートル以下の山に高額の入山料を課さず、無料で登山許可を出してくれる。このピークもそれに該当し、1人で多額の入山料を負担することなく楽しめた。

西北 東南

N

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度でお願いします）

狩野芳崖と妙義山

井上 佑

10月11～12日、第24回全国支部懇談会が北九州市で開催された。記念登山で私は、Cコース関門海峡を挟んだ分水嶺を案内した。車中で下関の「狩野芳崖悲母観音への軌跡展」の紹介をしたが、みな無関心であった。生誕180年になり、121回法要も営まれた。

芳崖は、幕末、長府藩御用絵師の子として下関に生まれ、江戸で学び、江戸城の襖絵も描いている。明治維新により藩主御用絵師としての俸禄を失い困窮、養蚕に取り組み、文具店を開いたりしたが失敗の連続であった。明治10年、東京に移住するが困窮は続き、妻は荒物屋をやり家計を助けた。

明治15年、フェノロサと出会い、日本画革新運動の旗手として、岡倉天心らと共に狩野派に西洋画法を取り入れ、近代日本画の創生に成功した。文部省御用掛から図画取調掛に採用され、伊藤博文に美術学校設立の急務を説いた。

妙義山は群馬県安中市・富岡市・下仁田町にまたがり、標高110メートルで、妙義荒船佐久高原国定公園の中核をなしている。

『新日本山岳誌』には「多くの文人墨客によって紹介されているが、当時は鋸歯のような稜線を歩くのは困難を極めたため、山腹や山麓から眺める山であったようである。(略) 妙義山塊は凝灰角礫岩、凝灰岩などからなる険しい岩山で」とある。第4石門から他の石門を眺望する景観は特別である。

明治20年3月26日、芳崖は狩野友信、岡不崩とともに、東京から雪の残る妙義山へスケッチ旅行に行く。中の嶽の石門をくぐって「嶽美しくあやにたふちきかむろぎの神のつくれる此おおみ山」の和歌を作り、「ここに観音様が降りたらよかろう」と言った。

南は開聞岳や桜島など多くの山を目にしている芳崖であったが、妙義山は初めて目にした鋭い岩山であり、強烈な印象を受け、そのモチーフのひとつになった。母を想う芳崖にとって、妙義山より故郷の満珠千珠の島の方がよりふさわしいと思えるのだが。

石門は「懸崖飛沫」になって、妙義の尖鋒は「妙義山仏界地取」はもちろん、「暁霧山水」「不動明王」「岩石」にも描かれ、妙義山スケッチ旅行は、「悲母観音」（重要文化財、東京芸術大学蔵）のためであり、図左下には岩峰が描かれた。「非母観音」は芳崖画業の再出発点であるが、これが絶筆になった。

金華山1万回登頂を祝う

原 満紀

以前、会報『山』702号に5000回登頂の報告をいたしましたが、その後も岐阜市内の金華山（329メートル）に登り続けていた岐阜支部の岡田清美会員（73歳）が10月18日に、ついに1万回登頂の金字塔を打ちたてました。

退職後から登り始め、実に13年7カ月を費やして成し遂げた、素晴らしい記録です。当日の記念登頂会は好天に恵まれ、10時30分、大勢の友人とともに、東側の岩戸尾根コースより山頂を目指しました。そして11時30分ごろ、山頂にある岐阜城資料館に到着。近くに設けられた祝賀会会場には、県内外の山仲間約80余名が参加し、盛大なセレモニーが開催されました。

最近はほぼ毎日、6時ごろから1日に2～3回登るのが日課となっていたようです。満願達成の日を決めてから「重苦しい雰囲気のなかで強くプレッシャーを感じて気が重くなる日もありました。ですが、あと1週間を残して1日1回の登山で念願がかなうと思ってからは、開放感からか登るのが楽しく足取りも軽やかになりました」と、ホッとした顔で語っていたのがとても印象的でした。

この山登りをずっと見守り続けてこられた妻の育子さんも一緒に登られ、仲間の友情を心から喜んでおられました。彼女も岐阜支部

金華山１万回登頂を達成した岡田清美会員

の会員で、金華山にも一緒に250回登頂されています。

セレモニー終了後、七曲りコースを下山しながら「これからは登頂の回数を気にすることなく、気楽な気持ちで金華山に登り続けたいです」と、しみじみ語っていました。

彼のたゆまぬ努力と、不屈の精神力に感服すると同時に、この素晴らしい記録に心より祝福申し上げる次第です。

新曲『地球をこわさないで！』誕生秘話

近藤　緑

耳をすまして聞いてごらん
花と虫たちがうたっていたり
小鳥と雲が合唱したり……

斎藤恭子（ソプラノ）さんの澄んだ歌声に導かれて、会場に集まった50余人の合唱が紅葉の谷間に響き渡った。時は10月27日、場所は南アルプス芦安山岳館に隣接した小ホール。

ゆたかな地球をゆたかなままに
子どもたちに手渡すために……

新曲発表のこの日、集まったのは自然保護委員とそれを支援するJAC会員・非会員および地元合唱団の人々。伴奏は作曲者の中島はるさんが務めてくださった。

2007年11月、富士山麓西湖で開催された全国集会で、組曲「三つの地球の歌」が演奏された。

峯陽作詞・中島はる作曲になるこの歌曲は、一・生命を紡ぐ星、二・地球が病気です、三・地球の子もり歌、からなる三部作で、多くの生命を育んできた地球が、環境汚染のため発熱して毎日の回転もままならない。はやく休んで自然のままの地球を取り戻すように、という、環境問題を歌いあげたものだった。ある音楽会で初めてこれを聞いたとき私は、自然保護全国集会で演奏できないものかと思った。

幸い作曲者の中島はるさんと私の姪とは、古くからの音楽仲間であった。姪に相談すると喜んで協力するといってくれた。姪は邦楽なので、伴奏譜も箏と十七絃とに作曲し直す必要があった。中島さんは労をいとわず、その編曲を仕上げてくださった。お蔭でとかく堅い論議の続く自然保護集会にひと味ちがった音楽による問題提起ができた。

さて、それからである。夜の懇親会で作曲者に「もっとやさしい誰もが歌えるような歌がつくれないか」と持ちかけた人がいた。山の自然学クラブの大森弘一郎さんである。彼なりに本気で、その後しばらく可愛いい（？）童謡詩を書こうと苦心したらしい。私のところに草稿が届いたこともあったが、そのまま中島さんに転送するわけにもいかなかった。

それから半年、忘れかけたころに同じ峯・中島コンビによる『地球をこわさないで！』の楽譜が送られてきた。そして秋の南アルプス山麓でのお披露目コンサートに繋がったというわけである。

この話をある人にしたら「山岳会は金があるんだね」と言われた。作曲者は友人でも作詞家峯陽といえば、その世界では知られた詩人である。いくらなんでも菓子折りひとつというわけにはいくまい。私にできるのは誠心誠意お礼状を書くことしかなかった。コンサートの報告とともに「これからの自然保護運動に役立てていきたい」と記した。

折り返し、峯さんから返事が来た。「今日は文化の日。地球あっての文化です。ご活躍を！」。嬉しかった。

支部だより

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとリポートします。

福井支部
第1回「森づくり」を開催

福井県では「未来へつなごう元気な森　元気なふるさと」をテーマに「第60回全国植樹祭」を2009年6月に実施する。

福井支部では、10月26日に里山の再生（持続可能な自然との共生をして生きてきた祖先の知恵に学びこれを受け継ぐ）を目的として「森づくり」を開催、11名の会員が参加した。

まず、近くの小倉集落センターで机上学習として、三上伊三男氏からスライドによる森づくり、里山についての講話を受け、意見交換により森づくりについて理解を深めた。

私は、一志治夫の『3000万本の木を植えた男』『魂の森を行け』を読み、森づくりに関心を持ち、支部会員に提唱した1人として、高齢の会員も気楽に参加できる場所をと考えた。そして、白山開山の泰澄ゆかりの越知山周辺を候補にあげた。地元の安井賢二会員に相談したところ、越前町有地を日本山岳会福井支部による森づくり事業（里山の再生、維持管理）の場所として使用許可をもらい実現できた。

昼食をセンターで済ませ、現地に移動。樹林帯に入り、手入れのされていない藪のなかを歩く。低地には池があるが、葦が生い茂りメダカなど皆無の状態だ。裸地に戻り、地元の会員がすでに用意をしてくれていたクヌギ、クリ、コナラ、カシワなど6種類の苗木約60本を植樹した。この苗木は、生態系に配慮して、すべて町内で拾った種子から地元会員が育てたものである。

先述の著書のなかに、福井県越前武生は総持寺開山、蛍山禅師の誕生の地で、御誕生寺の住職・板橋興宗が裏山を鎮守の森にするため、宮脇先生直伝の森づくりをやる。福井支部は、記述にあるように植樹した。

（宮本数男）

里山の再生を目的とした「森づくり」を始動

山梨支部
60周年記念集会

11月15、16日、甲州市勝沼町のぶどうの丘で設立60周年記念集会を開きました。宮下秀樹会長はじめ来賓と支部会員約50人が出席、さらなる発展を誓いました。

記念式典では、古屋学而支部長が、設立の経過や先人の業績をしのんだ後、日本列島中央分水嶺の踏査、4回にわたって開いた「山の博覧会」、60周年事業として実施した「登山史を歩く」、充実した支部山行などの活動を踏まえ、「公益法人化への流れのなかで、山梨支部の活動は高い評価を受けています。今後も支部会員とともに一層の発展を図りたい」とあいさつ。

本部の宮下会長、山梨県山岳連盟の内藤順造会長、信濃支部の金子丞二支部長から祝辞をいただき、深沢健三支部委員長が活動報告を行ないました。

式典後は、本部の田辺寿・前副会長が「山のこと　アレ・これ」と題して記念講演。全員での記念写真撮影に続いて懇親会に移り、山梨で解禁されたばかりのヌーボーで乾杯。和やかに懇談しました。会場には会員の写真や絵画を展示。活動の一端を紹介しました。

16日は甲州高尾山への記念登山でしたが、あいにくの雨でコースを短縮して歩きました。

山梨支部は1948年12月11日に設立。現在の会員は78人。60周年記念誌『甲斐山岳』は1月に発行します。

（深沢健三）

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

図書委員会――第18回「山を語る」

10月22日、104号室には立ち見があふれ、部屋に入りきれない人が廊下で耳を傾けるという、前代未聞の状態になった。近藤等名誉会員に「アルプスの人と山」というテーマで語っていただく。それに加え司会進行は飯田年穂会員（明治大学教授で山岳部長）、ゲストに翻訳家の海津正彦氏という贅沢な顔ぶれなのだから満員御礼もうなずける。参加者は85名におよんだ。

近藤さんは、『処女峰アンナプルナ』『星と嵐』など多くの本の翻訳や、クライマーとしても活躍され、その功績でフランス政府のレジョン・ドヌール勲章の授与を受け、シャモニの名誉市民にも選ばれている。今回は特に、深い親交のあったガストン・レビュファ、アンドレ・コンタミヌ、そして中野融の3人のクライマーについて語っていただいた。

身近で接した近藤さんならではのエピソードが披露された。なかでも特に興味深かったのは、ふだんはたいへん物静かなレビュファが、クライミング中はとても強引な登り方をしたのに対して、コンタミヌは軽飛行機がふんわりと飛んでいるような、力を使わない登り方をするという点だ。「岩登りだけなら、レビュファよりコンタミヌの方が上かもしれない」という言葉が強く印象に残る。

また、近藤さんより25歳も若かった中野融氏のことを、「よいパートナーでした。そしてよいリーダーでした」とふり返る言葉には、若くして逝った登山家に対する深い信頼と愛情が感じられた。

話は終始、ウィットに富み、時に海津氏と飯田氏が話題に加わり、3人の会話のキャッチボールは楽しく和やかなものだった。合間には、近藤さんが持参された貴重なオリジナルのモノクロ写真が、惜しみなく会場に回覧された。手元に回ってくる写真は、レビュファだったりエルゾーグの近影だったりするのだった。

しばし私たちの時は遡り、山と人、人と人が愛情と尊敬をもって対峙・邂逅した、美しい調和のとれた時代の空気に触れることができた。

（三好まき子）

集会委員会――秋の大和三山を行く

11月1日、歴史好きの会員16名が集合。快晴ののどかな飛鳥路をまずは高松塚古墳を目指す。高松塚古墳は白虎・青龍・玄武などの装飾古墳で被葬者は壬申の乱で活躍した忍壁皇子といわれている。講師より古墳は藤原京の南北線上にあるとの説明を受ける。

昼食後、文武天皇陵を拝し猿石・欽明天皇陵へ。吉備姫王檜隈墓内にあり猿石と呼ばれる、高さ1メートルほどの四体の石像が座している。日本人のルーツは航海術に優れた海人族ともいわれているが、イースター島のモアイ像にも通じるものを感じた。古代の人々はこの石像にどんな願いを込めたのだろうか。欽明天皇陵、鬼の雪隠、鬼の俎板、天武・持統天皇陵を参拝し亀石を見学し橘寺、石舞台古墳へと歩く。被葬者は6世紀後半にこの地で政権を握った蘇我馬子の墓ではないかといわれている。

続いて中大兄皇子らが蘇我入鹿を殺害し乙巳の変を断行した飛鳥板蓋宮に至る。宮の石畳が残り遠くに天香具山と耳成山が望まれる。この場所で乙巳の変が起こったのかと思うと古代にタイムスリップしたような不思議な思いがした。

歴史探訪の山旅を楽しむ参加者

飛鳥寺の蘇我入鹿の首塚には今も花が手向けられていた。日本で初めての水時計が作られた水落遺跡を巡り、夕暮れの甘樫丘に立ち畝傍山・耳成山・天香具山を望み、明日の大和三山に思いを馳せた。

11月2日、朝曇っていた空も次第に晴れ上がり昨日に劣らぬ天気となった。7時30分に宿を出発、久米仙人で有名な久米寺へと向かう。1日の安全を祈り橿原神宮を参拝。神武天皇・媛踏鞴五十鈴媛皇后を祭神とする美しい神社である。神社脇の登山口より畝傍山に向かう。照葉樹林帯を抜けると、いつの間にか山頂に到着。万葉集に歌われている畝傍山をめぐっての耳成山・香具山の二山が争う山争いの説明を聞く。

下山は東斜面の急なルートを下る。朝の清々しい空気のなかを神武天皇陵に参拝し、一路香具山へと向かう。途中小休止を挟み東に約2時間、登山口の天岩戸神社に到着。天香具山は持統天皇の御製歌「春過ぎて夏来るらし白妙の衣干したり天の香具山」で有名な美しい山である。11時過ぎ山頂到着。

続いて、天香具山神社に向かう。正面に耳成山が聳え、コスモスの花が美しい。藤原京の運河と博物館を見学し藤原京の全容を学んだ。藤原京の中軸線を北に進み、いよいよ最後の耳成山へと向かう。神さびた静かな神域の山である。山頂近くの耳成山口神社脇を通って山頂に到着。

今回の大和三山は、高橋重之会員の資料を事前に予習しての歴史探訪の旅となり、充実した2日間の飛鳥路となった。（梁取静五）

山の自然学研究会――ヒマラヤ越えチベット青蔵鉄道13日間

当研究会では、毎年「山はどうして高くなったか」というテーマで海外研修山行を行なっている。本年はヒマラヤ山脈を超え、チベット高原がどうやって出来たかを巡検紀行に出かけた。

10月24日、当会会員16名が成田に集合、北京経由で成都に向かう。25日、成都からカトマンズに。晴天に恵まれ空から8000メートルの峰々を間近に見ることができた。26日、カトマンズから陸路コダリへ。コダリから中国国境の町ザンムーに入る。27日、ニェラムで高所順応のため4000メートルの丘陵状の高原ハイクを行なう。周りには7000メートル級の無名峰。28日、チベット高原の核心ヤルレ・ブ・シュンラ峠（5188メートル）に立つ。マカルー・チョモランマ・ローツェ・チョオユー・シシャパンマの8000メートルの峰々の360度の大展望を眺める。

ヤルレ・ブ・シュンラ峠にて、シシャパンマを背景に

29日、シーガル滞在。周りのなだらかな丘陵状高原は数十万年前の周氷河地形によるものか。30日、快晴のチョモランマBCに登る。パン・ラ峠で東西横一列に並んだ8000メートル峰五座を見る。ヒマラヤ最高山稜まで幾重の山脈を見ることができた。これがインドプレートとユーラシアプレートの衝突の結果できた地形だ。31日、シーガルからシガツェに。カツォーラ峠でコース最高地点5220メートルを行く。11月1日、ラサへ。2日、ポタラ宮を見学。3～4日、ラサから青蔵鉄道の旅へ。5日、西寧～北京～成田へ帰国。

13日間のチベット紀行には難事難題があったが、参加者の団結と協力で乗り越えられた。ヒマラヤ・チベットの現地で、地球の脈動の証拠を見ることができた。山の自然学の観察成果は大きかった。（船橋　明）

図書紹介

『ゴローのヒマラヤ回想録』

岩坪五郎・著

2008年10月
ナカニシヤ出版刊
四六判　237ページ
定価　2100円

著者は、当会の現評議員で、ＡＡＣＫ（京都学士山岳会）の重鎮である。１９５７年のスワート・ヒマラヤへの遠征参加をはじめ半世紀にわたって7回もヒマラヤに赴いたヒマラヤ登山のベテランである。書名が「ヒマラヤ回想録」となっているが、内容はそれにとどまらず広範囲にわたるものだ。著者が今まで書いてきた文章をまとめたものである。

最終章にひっそりと遠慮がちに書いているが、最近の著者が全力をあげて当たってきたのが「大日岳遭難事件」の山本、高村救出作戦であり、その報告書の作成であった。著者自身も「お役に立った」と自負する」と書いているが、粉骨砕身、努力されたことを高く評価したい。

第一章の今西錦司氏や桑原武夫氏など多くの山の先輩について書かれたいくつかの文章は、ご本人は「落語的人物論」と題しているが、これらの山の先輩達への著者の深い思い入れがよく書かれており、このような優れた先輩に接して人生を過ごしてきた著者の幸せな境遇に羨望の念を禁じ得ない。

「教官として給料をもらっている以上それらしいことをいわねば」と、なかば照れて書いている第五章の「地球科学論議」は、森林や、ヒマラヤの雪や気温のことについての著者の考えを述べたものである。会報『山』に寄稿したものなどが含まれるが、森林生態学を専門とする学者の立場で、科学的根拠に基づいて冷静に書かれてあり、さすがだなと啓発されるところが多い。炭酸ガスの削減に効果があるとされる森林も、老木ばかりの森では効果がうすく、常に成長しつつある状態にしておかなければ炭酸ガスを固定させられないという指摘などには、著者が日本の森林の活性化を強く訴えているように感じられた。

唯一書き下ろした第三章の「大学と研究室」は京都大学についての感想や、大学闘争に参加した話などだが、京都の風土を上手に表現しており、なるほどとうなずくところが多かった。

ＡＡＣＫのなかでの登山派と探検派の対立を北朝と南朝との対立と表現しているところなどはさすが古都に住む人ならではのだなと思った。表題となっている比喩ヒマラヤについての文章でもはなにヒマラヤを回想するだけで、単く遭難における責任体制や、報道機関への対処の仕方、人の使い方など、鋭い指摘がされていて、示唆に富んだものになっている。

この本の表紙に芳賀淳子会員が描かれたバルトロカンリのスケッチを見つけ嬉しかった。著者に会って話をうかがう時に感じる独特の楽しい雰囲気を、文章を読んでも感じることができる好著である。

（藤本慶光）

『山なみ帖　その後』

小谷隆一・著

2008年11月
茗溪堂刊
Ａ5変形判　277ページ
定価　2415円

本書は、一昨年3月に逝去された著者の遺稿をご家族が刊行したもので、著書として2冊目となる。装丁は色遣いも瀟洒で、お洒落な小谷さんにピッタリの仕上りだ。

前半部の書名『山なみ帖』の由来や旧制松本高等学校時代の回想文等は、大森久雄氏による前著の紹介文（会報『山』４４５号）に譲るが、今回、同窓の辻邦生や北杜夫、恩師の古川久や望月市恵らの若き日の自筆手記には興味をそそられる。また〈「晩秋の美ヶ原」とその後〉は、女学生との山行という前著の題材を書き改めた上に、後日談を加えており、著者の青春の一齣への特別な想いを感じざる

を得ない。

その他、ヒマラヤ遠征、40回を超える渡欧先の定宿やスキー、登山の話と続くが、後半部は山岳書コレクターとしてのもうひとつの顔を窺うことができる。なかでも、松本高等学校山岳部報『わらぢ』に関する60ページにも及ぶ詳細な考察は見事というほかはない。

筆者が、JAC創立70周年記念の山岳名著覆刻事業に関係し、原本借用のために小谷邸を初めて訪問したのは、小林義正氏の高嶺文庫を引き継いで間もない昭和49年の晩秋であった。奥に通されると、なんと冷房の効いた居間一面に書物を広げて湿気取りの真っ最中、あわてて許しを得て、先ほど脱いだばかりのコートを羽織ったのだった。以後、20も齢下の筆者は、小谷さんから多くの思い出と教訓をいただくことになる。

例えば、借用した『名山図譜』の書誌的な比定を終えた頃、京都大丸の「山岳展」での小谷コレクション初公開に際し、『図譜』の解説文執筆を依頼された。展覧会後にいただいた礼状には、1週間余の展示期間の心配や展示ケース内の蛍光灯を外させたこと、最終日には自ら出品物のトランク詰めをし、帰宅後すぐに冷房をつけて乾燥させたこと等々、真にコレクターならではの書物へのこまやかな愛情が綴られていたのである。

〈山は道場である〉〈山は足で登るだけのものではない〉という京都二商の恩師・森本次男の教えを終生大切にされ、山を、人を、そして書物を愛した著者の心意気と優しさが本書からひしひしと伝わってくる。同時に、片手をズボンのポケットに突っ込み、やや前かがみで歩く小谷さんの姿が目に浮かんでくるのである。（小川益男）

『登山道の保全と管理』

渡辺悌二・編著

2008年9月
古今書院刊
A5判　212ページ
定価　3675円

まえがきを見てまず驚いた。登山道の荒廃に関する学術研究は、欧米、ニュージーランドではほとんど行なわれておらず、日本では環境省との協力による研究が比較的多いというのだ。これは、日本の山地の地質的特長のほかに、日本の国民性とそれから来る行政のあり方によるのでは、と思わせる。日本全国の大学で行なわれた卒論（23件）、修士論文（15件）、博士論文（1件）の標題がそれを示している。

日本の登山道の荒廃は著しい。登山道を荒らすために整備工事がなされたのでは、と思いたくなる現場を目にすることが多い。

この本は17名の執筆者によるもので、これまでの環境省による検討委員会での議論と、そこから発展した自然科学的研究の成果をまとめた、とあるが、環境行政への批判も忌憚なく記されている点で極めて建設的な内容である。

まず登山道問題が起こる背景に続いて荒廃状態の調査方法、従来から用いられている登山道の維持管理工法の適用性とその問題点、維持管理の現状と今後の方向性などが木目細かに記述されている。

大雪山国立公園でなされた登山道整備公共事業の場所と規模と予算の表は参考になる。

実際に実施されている各種の工法が写真とともに示されてその特徴が説明されている。

降雨時の流水のエネルギーを自然に減じて、さらなる侵食を防ぐ「近自然登山道工法」と称する工法も写真と図によって説明されている。現地の材料を使い、各種の工法の特長を生かして、その場に最適な工事を小さい予算で登山道を維持しようとするもので、最も望ましい工法であるが、工事費の予算計上のための積算が可能な規格化された工法ではないため、現在の公共事業にはそぐわない。

登山道における現公共事業の問題点は、前述したように規格化された工法でなければならないことのほかに、荒廃が著しくなってからしか予算要求ができないこと、毎年度必要な維持管理のための予算獲得ができずに対症療法的工法になることだという。

道路の侵食断面の構造をデジカメ、GPS、測量尺棒、巻尺をひとつずつ使って測量する方法や、今後どの程度まで侵食が進むかを予測する土壌構造の電気探査方法などは極めて興味深く、参考文献のリストも充実している。

オーストラリアやニュージーランドでよく見られ、日本人が羨んでいる金属メッシュ工法は自然に

優しく、工事が容易で木道より低コストなどの利点がある一方、非自然的な景観や落雷の恐れなどの問題が指摘されている。

登山道の維持管理の要諦は工事後の常時かつ継続的な観察によって、施工された工法の問題点を摘出し早期対応することであり、ボランティアの活動への期待は高い。しかし、ボランティアによる不適切な工法による荒廃の進行や事故を防止するための技術の継承と向上は不可欠である。

中央分水嶺踏査で示された当山岳会のエネルギーは、著者らの今後の全国的・総合的調査活動に生かせられないものかなどと思いつつ読まされた。

（織方郁映）

三宅 修、三宅 岳・著
『心の山登り――親子が山で教えられたこと』

2008年8月
リヨン社刊
B6判　237ページ
定価　1575円

ともに山岳写真家である2人。父から子へと手渡したかったものは、そして子どもが受け継いだものは何であったか。

父、三宅修の原点が、戦争末期の中学時代に遭遇した湯の花トンネルでの機銃掃射の惨状だったことは聞いていた。のちに入学した東京外語大の山岳部設立に当たり、生涯の師である串田孫一先生に出会うことによって、戦争による人間不信から脱却、自ら選んだ人生を歩くことになる。以来、喜寿に近い今日まで、山と写真とペンとで生きてきた。自分の時代は、登山も山岳写真も〝上げ潮〟だったからプロを夢見ることもできたと父は言う。しかし、今の時代は……と、同じ道を生きようとする息子を思って親心が揺れる。

幼いころの岳は、大原交差点近くに住んで、喘息に苦しんだ。その後、相模湖畔の藤野町に転居することで、緑の山と澄んだ大気と美味い水を手に入れた。喘息を克服した岳少年は、地元の子どもと山野で遊び、父に連れられて北アルプスにも出かけるようになる。そうした子連れ登山の失敗談やスナップ写真なども載っている。このあたりは、山岳会員なら誰もが身に覚えのあることだろう。

思い通りの「父と子の山立独歩」の後、成人した息子が父と同じ独歩の写真家の道を選ぶことになったら、さて、親としてどうするか。

ところが息子は、父とは違ったテーマを見つけていた。中学時代から自然保護への関心を深めてきた彼は、自然ひとすじの父と違って「山に生きる」人々に日本人の原点を追っている。そしてオヤジ同様さっさと勤めを辞めてしまい、ライフワークに打ち込みながら、一家を構え、娘花乃との「父と娘の山」を実践している。

この本には、母であり妻である人びとも登場する。フリーの夫を背後でしっかり支えてきた修夫人、岳の成長の陰にはこの母の力が大きい。決して自然児だけではない、知性を育てるためには塾通いの時期もあったことも率直に書かれている。どうやら賢夫人の系譜は嫁の岳夫人にも受け継がれているらしい。羨ましいようなファミリーと思いながら、楽しく読み終えた。

（近藤 緑）

図書受入報告（2008年11月）

著　者	書　　名	ページ・サイズ	出版元	刊行年	寄贈／購入別
服部文祥	サバイバル!――人はズルなしで生きられるのか（ちくま新書 No.751）	254p／18cm	筑摩書房	2008	出版社寄贈
早津賢二	妙高火山群――多世代火山のライフヒストリー	424p／31cm	実業公報社	2008	著者寄贈
梅野淑子	初期女性登山――信仰登山と学校登山の始まり	74p／22cm	梅野淑子（私家版）	2008	著者寄贈
伊藤久次郎　関口興洋（共編）	踏みあと――日本山岳会創立100周年記念事業日本列島中央分水嶺踏査記録	163p／26cm	日本山岳会北九州支部	2008	発行者寄贈
深谷健雄	日本300名山スケッチ登頂――半世紀をかけて達成した感動の山旅	207p／26cm	新ハイキング社	2008	出版社寄贈
宮崎稔	雲取山（写真集）	96p／25cm	日本経済評論社	2008	著者寄贈
日本山岳会自然保護委員会（編）	山の環境意識調査（報告書）――日本山岳会会員1912人の意見	97p／30cm	日本山岳会自然保護委員会	2008	発行者寄贈

会務報告

平成20年度第7回（11月度）理事会

日時　平成20年11月12日　18時35分～20時40分
場所　日本山岳会会議室
【出席者】宮下会長、神崎副会長、宮崎・吉永・成川各常務理事、斎藤・藤井・石橋・古野・太田・堀井・相馬・山川・岡部各理事、深川・竹中各監事、近藤常任評議員、神長会報編集委員長
【委任】鯵坂副会長
【欠席】日下田・河野各常任評議員

【審議事項】

1・秩父宮記念山岳賞候補業績の推薦（宮崎）

秩父宮記念山岳賞審査委員会から「大日岳巨大雪庇の形成機構に関する研究」および「冬季ローツェ南壁世界初登攀」の2件の推薦があった。（承認）

2・資料の貸出しに関する規定の改廃について（石橋）

改廃の主な点は、①貸出しの可否決定と理事会への報告（第6条）②貸出し料基準（第10条）および貸出し基準の決定、承認手続き（第12条）である。（案の一部を修正し承認）

3・「日本300名山」使用許可申請（宮崎）

（株）新ハイキング社から近々刊行予定の『日本300名山　スケッチ登頂』に当会所有の「日本300名山」の名称とその内容である選定の山を使用したい旨の依頼があった。（承認）

【報告事項】

1・平成20年度名誉会員の推薦（宮崎）

10月18日に評議員会を開催し審議の結果、中村純二（会員No.45441）および中村保（会員No.48337）の2名に決定した。

2・平成20年度上期監査報告（深川、竹中）

10月29日実施。現預金残高と帳簿・通帳等残高、基金・積立金・準備金等の照合の結果一致を確認した。また、銀行口座の整理統廃合、会費払込状況把握管理システムの見直し、積立金運用のルール化については従来からの懸案事項であると指摘された。

3・平成20年度上半期予算執行状況（報告）及び平成21年度予算案策定等について（吉永）

各委員会委員長宛に11月12日付で通知した。今年度下期予算執行につき厳しい状況のもと「使いきり」を厳に慎むこと、また21年度予算案策定については公益目的事業に留意して計画策定するよう協力依頼をした。

4・海外助成金対象登山隊の報告（古野）

助成対象となった①カメット南東稜、②インド・カランカを達成。ついては、それぞれ初登攀に③ネパール・カンテガ北壁には、当初の結果が得られなかった。

5・上ホロカメットク山雪崩遭難事故1周年追悼の会の開催について（宮崎）

北海道支部から11月15日に行なうとの連絡があった。

6・年次晩餐会予定（宮崎）

11月12日現在の出席回答は300名程度である。今後各委員会、同好会等に働きかけていくので各理事にさらなるご協力をお願いする。

7・支部長会議予定（宮崎・吉永）

12月6日、ルームで開催する。今年度の支部助成金の収支報告については法人改革に伴い新しい方式を説明、協力を依頼する。実務担当者に対しては、来年2月7～8日の全国支部事務局担当者会議で徹底を図りたい。

8・講習会実施案内（古野）

一昨年から実施の「救急救命法講習会」「雪崩講習会」等々に準じて今年度も行なう。会員に向けて広報をしていく。

9・岳沢　公衆トイレ・休憩所設置について（陳情）（宮崎）

岳沢ヒュッテ雪崩倒壊以降同地域に公衆トイレ・休憩所はなく、今年の松本市による仮設トイレのみである。恒久的な施設建設に向け本会が環境省等関係先に働きかけを行なってほしいとの依頼状が信濃支部及び上高地町会、北アルプス山小屋友交会等地元からあった。

10・気象予報士による気象予報（宮崎・古野）

冬山の遭難対策等に資するため日本山岳会のホームページや携帯電話を使って北アルプスの槍ヶ岳・穂高岳、剱岳・立山および八ヶ岳の3地域の登山者、バックカントリースキーヤー等を対象とした天気予報を、12月から試験的に実施することになった。

11・第24回宮崎ウェストン祭・記念登山等の開催について（宮崎）

11月2～3日に宮崎県高千穂町で行なわれた。

12・委員会報告（相馬）

学生部からマラソンの状況について報告。参加者16校79名。団体優勝は明治大学山岳部、個人優勝男子は大貫敏史（早稲田大学山岳部OB）、女子は呉恵芳（東京農業大学3年）。

13・会報『山』11月号編集報告（神長）

ルーム日誌 11月

4日　図書委員会　アルパインスケッチクラブ
5日　常務理事会　集会委員会　山岳地理クラブ
6日　図書委員会　アルパインフォトクラブ　101会
7日　アルパインスキークラブ
10日　総務委員会　アルパインスキークラブ　アルパインスケッチクラブ
11日　アルパインスキークラブ　二火会　九五会
12日　理事会　学生部　山想倶楽部　休山会
13日　科学委員会　自然保護委員会　山の自然学研究会
14日　総務委員会　会報委員会　高尾の森づくり会
15日　SUN燦会
17日　総務委員会　資料映像委員会　アルパインスキークラブ
18日　山研運営委員会　00会　アルパインスキークラブ
19日　指導委員会　三水会　つくも会　山岳地理クラブ
20日　科学委員会　指導委員会
21日　常務理事会
25日　総務委員会　インターネット小委員会　千葉支部　ゆきわり会
26日　自然保護委員会　アルパインフォトビデオクラブ　麗山会　101の会
27日　総務委員会　定款検討委員会　集会委員会　海外委員会　アルパインスケッチクラブ　山遊会
28日　総務委員会　図書委員会

11月来室者535名

会員異動（11月）

物故

山口　克（4089）08・11・8
藤塚吉太郎（10801）08・4・24

退会

佐藤　義正（7504）宮城支部
柏　秀樹（8917）関西支部
奥野　三朗（9061）
小田切直人（9965）福岡支部
芳村嘉一郎（13354）関西支部

INFORMATION

◆第5回土曜懇話会

集会委員会

日本人として初めて英国地理学協会からバスク・メダルを受賞された中村保名誉会員から、ヒマラヤの東の最新情報も含めてお話を伺います。

日時　平成21年1月17日（土）13時～
場所　日本山岳会104号室
テーマ　ヒマラヤの東
問合　下河辺史郎
（✉s-shimo@fg8.so-net.ne.jp FAX 03-3408-6519）

◆第18回「山好きの山の絵展」

アルパインスケッチクラブ

会期　平成21年2月22日(日)～28日(土)（10時～19時、ただし初日は12時から、最終日は17時まで）
会場　東京交通会館2階ギャラリー（千代田区有楽町2-10-1 TEL 03-3215-7962）
担当　田辺寿、深川安明、木村泰助

◆土曜放談会開催

新土曜会

どなたでも参加できます。

日時　平成21年1月31日(土)15時～17時
場所　日本山岳会集会室
費用　1000円
問合　箕岡三穂まで
（FAX 042-776-1788 ✉kjtc1937@theia.ocn.ne.jp）

■訂正とお詫び

11月（762）号、3ページ1段28行「加藤慶喜」は「加藤慶信」、12ページ1段14行「三年の役」は「後三年の役」の誤りでした。訂正して、お詫びします。

日本山岳会は、安全な登山を支援するための情報提供にかかわる技術的な課題を検討するため、冬山登山者向けに1カ月間限定で山岳の天気予報をインターネット、携帯電話で配信する試験運用を行ないます。

天気予報は、株式会社メテオテック・ラボのご協力により、ヒマラヤの登山経験もある気象予報士が、冬山天気予報を毎日発信します。

今年度は試験的に、パソコン版とメール配信版の2通りで、登山中も携帯メールで天気予報を受け取ることができます。

試験運用中の利用は無料。日本山岳会会員以外でも利用可能で、下記へアクセスし、登録の上ご利用下さい。

http://www.everest.co.jp/jacweather/

＊日本山岳会ホームページからもリンクがあります。

期間　2008年12月19日～2009年1月18日
山域　①北ア北部（剱・立山）
②北ア南部（槍・穂高）
③八ヶ岳

なお、試験運用は、情報配信の技術的試験を行なうものであり、本天気予報の結果、及びその利用に伴い生じるいかなる問題についても、当会は責任を持つものではありません。

❖編集後記❖

●『妻におくった九十九枚の絵葉書』の出版記念会は、心温まるとてもいい会でした。出版に至るエピソードが偶然の連続でおもしろく、その経緯を甲南山岳会の越田さんと京都大学学士山岳会の平井さんに綴ってもらいました。良書出版のあり方を再認識させられる思いでした。

●図書委員会の「山を語る」、近藤さんの話もとても楽しく、山と人のいいつき合い方が偲ばれました。

●3年ぶりに皇太子さまも出席されて、年次晩餐会も盛況のうちに終わりました。もう師走、月刊の会報を編集していると、本当にあっという間に1年が過ぎていきます。今年も大変お世話になりました。どうぞよい年をお迎えください。

（神長幹雄）

日本山岳会会報　山　763号

2008年（平成20年）12月20日発行
発行所　社団法人日本山岳会
〒102－0081
東京都千代田区四番町5－4
サンビューハイツ四番町
TEL　東京(03)3261－4433
FAX　東京(03)3261－4441
発行者　日本山岳会会長　宮下秀樹
編集人　神長幹雄
E-メール:jac-kaiho@jac.or.jp
印　刷　株式会社　双陽社